

天山北麓を駆ける間に物語を紡ぎ成長していく子どもと、子どもの創造した物語を通して過去の不幸な経験や悲しみを克服していく祖母と父親を描いている。「熊」と「老榆樹」をキーワードに前の世代の悲しみ、恨みを、次の世代が希望に転化していく過程をみずみずしく表現した作品である。

「高聳入云的地方」

70年代、新疆ウイグル西天山腹地を舞台に物語は始まる。伊犁河の最も長い支流、“喀什河”のほとりで、大空いっぱいの陽光を浴びながら洗濯をする娘。深い谷の合間を縫う“喀什河”の激流に落ちてしまった身重の「北山羊」を救い、その出産を助ける牧夫。やがて牧夫と娘は結ばれ、つつましくも幸せに暮らす。北山羊は命を救ってくれた牧夫の行動を友情と看做し、彼を山へ案内する。牧夫と北山羊は30日間天山を駆け巡りいっしょに過ごす。北山羊がひとびとの生活に影響を与えた時代はとうに終わっていたが、牧夫は唯一北山羊とコミットできる人間であった。妻は夫のまなざしが常に遠くの天山山頂を見ていることに不安を抱く。老藝人の物語から美しい娘を産むことに全力を注ぐ妻。出産後妻は夫と娘を残して死んでしまう。

作者は新疆西天山一帯を舞台に、古くからの言い伝えをモチーフとし、貴婦人のような北山羊を登場させ、神秘的な物語を創造した。老藝人のエピソードはやや浮いている印象を与えるが、「北山羊」の存在感は、読者にこの物語の神秘性を違和感なく受け入れさせる一助になった。さらに別の作品も読んでみたいと思わせる一作である。

10月例会（第187回）（2004/10/23）

韓少功『暗示』（02年 人民文学出版社、原載『鍾山』02年5期）

塩旗伸一郎

韓少功『暗示』は、中国「新时期」小説の文体探索の過程において、1985年に継ぐ“第二次实验浪潮”（陳思和「多元格局下的小说文体实验」『上海文学』98年7期）の一例とされた『马桥词典』（馬橋辞典1996年）の継承・発展であると同時に、その再顛覆である。

陳氏も指摘するように、『马桥词典』における「顛覆」は、「辞典」の体裁を採ることで伝統的な小説の形式に対して為されたという以上に、湘東方言を運用した“马桥”語の創設により、日常生活の拠って立つ“普通话”に対して行なわれた側面が見逃せない。そうすることで、日常生活の中で意識されない領域へと読者を誘い入れたのである。

他方、『暗示』における「転覆」について作者自身は、『马桥词典』を書き終えた後で「人間は言語の中でしか生活できない」と言った瞬間、「私は心中に疑いを抱き始めた。のみならず、次の本でその結論を覆したいと思うようになった」(前言)と語る。

今回の考察対象は、個人や集団の体験(生活)の集積である記憶に裏づけられた“隠秘情報”が潜む“意識暗区”である。作者はその試みを、「言語を用いて言語に挑戦し」、「言語を用いて、言語が覆い隠したより多くの生活の真相を明らかにする」「自分との闘い」と位置づける。作者を含め多くの人間は、言語による思考に慣れ、言語の「心智」に対する呪縛に慣れてしまったため、「非言説」の情報に対して感受機能を欠いている。言葉が届くことのない場所(厳密には「言葉が密かに潜伏する場所」—「言語」章)に、生活がいたい存在するの否か、或いはどのように存在し得るのかを見究めようというのである。

探求の過程は巻ごとに四つの位相に分かれる。巻1が「秘められた情報」。場面、表情、容貌、服装、儀式などの事物が様ざまに我われに語りかけてくる身近な例について述べる。巻2が「具象符号の人生における地位と役割」。それらがどのように我われの記憶、感覚、上官、性格、運命などに介入しているかを考える。巻3が「具象符号の社会における地位と役割」。それらが我われの教育、政治、経済、暴力、都市化、文明伝統などに介入しているかを見る。「漢民族はとうの昔から文字化された大脳をもっている」ことに起因する問題が掘り起こされる。巻4が“言与象の互在”(言と象の相互連関的存在)。あらためて言語と具象がどのように相互に生成し相互に制御しあうかを探り、さらにその角度から、戦争、貧困、仇恨、圧政などの現代の危機の根底にある「知識の危機」を理解しようとする。

具象と感覚を素材としておいしい飲み物のような文学・藝術作品に仕上げることこそ、イデオロギーに馴らされた知識の危機の現われと作者は考える。それらの飲み物を吐き出して、顕微鏡で分析し、分解してあまりおいしくない薬剤を調合しようと試みた結果が、「文学を理論のように書き、理論を文学のように書いた」本書の登場となったのである。

例会では『韓少功自選集』(04年 海南出版社)から26章を抜粋した。同書は、オリジナル113章のうち、巻1から16章、巻2から17章、巻3から7章、巻4から6章の計46章を採る。抽象度のやや高い巻3、巻4からの採録が少ないのは偶然かもしれないが、それら一部の論理展開は、その方法論ほどは解りやすすくないとの指摘があった。韓少功自身、「優秀な文学は常にその生活の豊富性を以て、歴史の中に(人間の観念のみならず)人間を捜し出し、歴史の中で(屍でなく)活きた魂を躍動させる」と書くように(「性格」章)、“人”や“活魂”が活写される章段がより読み応えがあったといえる。

創造人物、「わたし」、実在人物の三者が入り組んで棲む作品世界の多層性や、前後の章を少しずつ絡ませながら、予告や「後出し」、「秘密」を交えて読者をひきつける手法は、『马桥词典』でおなじみである。その中で、「耳の排除機能や騙し絵と同様、記憶にも“隠

形”がある」(「消失」)、「月光を詠った唐詩のリズムと韻律を知る前と後で、月光は同じように輝くか。ふだん月光に親しむ人と、街灯やヘッドライト、ネオンにより親しむ人とで、唐詩の味わいは同じか」(「月光」)、「人間間の言語交流は“明言”のレベルでは一致しても“隱象”は複製も移植も不可能」(「語義」)といった命題を文学のように楽しみ、小説を読みながら理論のように考えることができれば、『暗示』の世界を存分に味わうことができるだろう。

11 月 例 会 (第188回) (2004/11/20)

閻連科「受活」(『小説選刊』2003年3期)

徳間佳信

作品は現在進行形で語られていくメインストーリーと、その注釈として随所に挿入されている無数のサブストーリー「絮言」からなるが、それをあえて一つながりのものにする、次のような筋立てになる。

レーニン記念堂を作ることで観光立県を目指している河南省の山岳部の県長・柳は、夏の大雪のため止宿した受活荘で障害者たちの「絶技」を見物し、彼らを一座として組織して、興行の儲けでレーニンの遺体を買うことを思いつく。受活荘は、全員が障害がある人たちの村だったが、昔から村人たちは助け合って豊かに暮らしてきた。しかし、解放後、双槐県に所属したために、「三年自然災害」や文革のとき、外部の人間たちから過酷な略奪や迫害にあってきた。そのため、村長の茅枝婆は、村を県の管轄から外してもらうよう四十年来訴えてきた。その彼女の制止にもかかわらず、村人たちは給与の高さにつられて柳の言に従う。一座の興行は各地で大当たりし、多大の儲けを県にもたらす。記念堂の落成式のとき、団は約束どおり最後の公演を行うが、その後で村人たちは県の幹部から有り金を奪われ、さらに運転手たちに記念堂に閉じ込められて、残りの金も奪われる。彼らは村らに帰って、また以前の生活に戻る。その一月後、村が県の管轄から外れる旨の文書を受け取り、茅枝婆は喜びのうちに息を引き取るのだった。レーニンの遺体買出しは、中央から許可されず、柳は県長職を罷免される。妻とも別れた彼は、自ら車に轢かれて両足を失い、受活荘に住み始める。

ここには、三種類の「天堂日子」(天国の暮らし)が語られている。①解放後の合作社化・公社化による「天堂日子」。②柳の夢想する改革開放経済下の消費的なそれ。③受活荘の村人たちの昔ながらの互助的なそれ。ストーリー展開に即すと、①は村人たちにとって過酷なだけのものであり、彼らは②に吸収されようとするが、けっきょく③に回帰することに